慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジャック・ドリール『自然の三つの領域』(1808)に見られる動物の描写と博物学(2)
Sub Title	Les descriptions des animaux et l'histoire naturelle dans Trois Règnes de la nature (1808) de Jacques Delille (2)
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.2 (2011. 12) ,p.166(91)- 181(76)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	牛場暁夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010002-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジャック・ドリール『自然の三つの領域』(1808)に見られる動物の描写と博物学(2)

井上　櫻子

危機に瀕していたフランス詩に新たな生命を吹き込もうとしたジャック・ドリール（1738－1813）が、晩年光を失うという不運に見舞われながらも目指したこと――それは、鉱物界、植物界、動物界という自然の三領域にみられる諸現象を以前にも増して稠密に描写しながら、事物の本性に迫ることであった。こうして生まれた『自然の三つの領域 *Trois Règnes de la nature*』（1808）は、作者自身その序文において示唆しているとおり[1]、古代ローマ詩人ルクレティウスに対する詩人の深い敬愛の念と同時に強い対抗意識に貫かれた作品である。『事物の本性について』から着想を得ながらも、これを凌駕する自然の歌を創造しようとしたドリールは、18世紀後半における最新の科学知をよりどころに自然の諸現象を描き出そうとした。

『自然の三つの領域』を一読すると、ドリールが物理学、科学、植物学などさまざまな自然科学の分野に目配りし、なかでも博物学の発展の動向に、ことのほか強い関心を寄せていたさまが看て取れる。言うまでもなく、この学問領域が18世紀のフランスで隆盛をきわめたのは、ビュフォンの『個別と一般の博物誌』がベストセラーになったことに負うところが大きい。そして、『自然の三つの領域』の序文にもビュフォンの豊かな詩才に対する作者の惜しみない賞賛が織り込まれており[2]、ドリールがビュフォンの熱心な読者であったことが垣間みられる。にもかかわらず、逆説的にもドリールは、やはり同じ序文において、ビュフォンとの影響関係をきっぱ

りと否定するのである。

> 恥ずかしながら打ち明けるなら、あらゆる博物誌学者の中で私が最も着想を借りることが少なかったのはビュフォン氏である。というのも、恵まれた人から剽窃すると、いともたやすく露見してしまうし、また、文学界の掟によって厳重に処罰されるからである[3]。

ドリールのこのような主張は、彼をビュフォンの亜流として非難する読者の存在をあらかじめ想定しているがゆえのものと言える。しかしながら、『自然の三つの領域』には『個別と一般の博物誌』に想を得たとおぼしき詩句が認められることは、早くも初版刊行時に、この作品の注釈を担当したキュヴィエらの自然科学者によって明かされている。すなわち、「第八歌」に挿入されたライオンとワシの生態の類似性に関する一節[4]が、ビュフォンの「オオワシ」についての解説[5]を下敷きにしているというのである[6]。とはいえ、ドリールがビュフォンの強い影響を受けながら動物の描写を展開したという事実は、『自然の三つの領域』という作品の価値を下げることにはつながらなかった。それどころか、この一節は、19世紀前半に広く流布していたとされる中等教育向けのフランス文学のアンソロジー、『フランス文学と道徳についての講義 *Leçons françaises de littérature et de morale*』（フランソワ・ノエル、ギスラン・ド・ラ・プラス編、初版1801）において、「模範的な描写」として紹介されているのである。

本論考では、『自然の三つの領域』第七歌、第八歌に展開されるさまざまな動物のタブロー――その多くがノエルに高く評価されている――の生成過程について、ビュフォンの『博物誌』との間に認められる一種の親和性に注目しながら検討してゆきたい。そして、描写の美学の誕生と自然科学との関連、さらには読書行為と文学創造との関連という問題について一つの解釈を提示したいと思う。

I.　独立種としてのロバへの関心

『自然の三つの領域』第八歌において、ドリールがビュフォンに依拠しながら雄々しいライオンとワシのタブローを織り交ぜたのは、ただ博物学的知識に基づいて動物の本性を教え伝えようとしたためだけではない。これらの猛禽、猛獣に関する詩句の配置に注目すれば、描写の対象とする動物の選択に美学的観点からの配慮も大きく作用しているのが分かる。人に恐れを抱かせる動物を詠うに先立ち、詩人は人間に最も身近な家畜であるロバの生態をつまびらかに分析してみせるのであるが、それは自然界に認められるコントラストを際立たせ、読者により強いインパクトを与えようとしてのことだと考えられる。つまり、ドリールはここで、バークの提唱する崇高の美学を実践に移そうとしているのである。

> ロバは馬ほど活発でなければ、勇気もなく、美しくもないので
> 馬の代わりになったとしても、そのライヴァルではない[7]。

ロバの特質を紹介する一節は、この家畜に対するやや否定的な見解の提示から始められる。そしてこの冒頭の詩句について、『自然の三つの領域』の注釈者はビュフォンを参照するよう促している。

> ロバは堕落した馬などではない。ロバは馬という種の中の「よそもの」でもなければ、無理にこの種に割り込もうとするものでもなく、また、雑種の馬というわけでもない。ロバにもほかの動物同様、同類がおり、独自の種が存在し、独自の地位がある。ロバはロバで純血種なのであって、馬ほどに華々しい高貴さは認められないとはいえ、馬と同じくらいに由緒正しく、古くから高貴な種として認められているのである[8]。

上掲の二詩行にのみ注目するならば、ロバについてのドリールとビュフォ

ンの見解は相矛盾するように思われる。というのも、詩人は気質の面でも、外見の面でもロバが馬に劣るとしているのに対し、博物学者はロバと馬が別々の種に属することを明確にさせた上で、ロバという種の独自性、正当性を強調しているからである。

しかしながら、この動物の日常に関して詩人が展開する詳細な描写を読み進めると、ドリールはロバのおかれている境遇が悲哀に満ちていると認めながらも、同時に人間の生活を支えるべく地道に労働するこの家畜に深い共感の念を寄せているのが明らかになる。

マルスが栄光に満ちた軍事訓練を施さなかったため
ロバは征服者ではなく、農業に従事する。
我が子よ、ロバにもその魅力と陽気な遊びがある。
若い頃は忍耐強く、頑強で、勇気があり、
恩知らずな主人に粘り強く奉仕し、
老兵という悲しい身分を得る[9]。

ロバは不幸なあまり、人の関心を惹く。
それゆえ偏見からロバを酷評したところで無駄だ。
その傲慢さにもかかわらず、歌に詠む詩人がいるのだから。
かくも多くの英雄を歌ったホメロスは
その詩においてロバを大アイアスのそばに置いた。
寓話はロバをセイレーンの馬と名付けた[10]。

確かに、ロバは馬のように軍事面で人間に役立つことはない。しかし、それは必ずしも動物種としてのロバの不完全さを示すものではない。「ロバにもその魅力と陽気な遊びがある」という詩句は、ロバという種の独自性を強調する『博物誌』の一節となぞらえられるだろう。実際、こののちドリールは、農耕に従事するロバが、驚くべき忍耐力をもって、時に自己を犠牲にしてまでも人間に奉仕するさまを描き、この動物に固有の美点を際

立たせようとしている[11]。さらに、「ホメロスは／その詩においてロバを大アイアスのそばに置いた」というくだりは、ロバを「馬と同じくらいに由緒正しく、古くから高貴な種として認められている」というビュフォンの主張と通底していると言えよう。しかしドリールはここで、動物種としてのロバの正当性を唱えるにあたり、ただビュフォンに追随し、その主張を引き写すだけではない。人々の臆見に抗し、この家畜の「由緒正しさ」を歌い上げるにあたり、ドリールは純然たる科学的根拠をよりどころにするのではなく、ホメロスがアキレウスに次ぐ大英雄とロバとを並べて歌に詠んだこと、寓話でロバが「セイレーンの馬」と呼ばれていることを引き合いにする。こうしてドリールは、博物学者の主張を詩人のまなざしをもって変奏してみせるのである。ロバの「美点と不幸」[12]を歌った一節には、この家畜に対する詩人の賞賛の念と哀れみの情とが織り込まれ、独特の詩情が醸し出される。科学的知識に基づいた客観的描写にとどまらぬタブローは、後年ノエルの目を惹くこととなり、その全体が『フランス文学と道徳についての講義』に引用されることとなるのである[13]。

II. 人間のよき伴侶、馬と犬への賛辞

『自然の三つの領域』に見られる動物のタブローについて、初版注釈者がビュフォンとの関連性を指摘しているのは、ライオンとワシ、ロバについての詩句にとどまっている。しかしこれ以外にも、第七歌、第八歌には『博物誌』を下敷きにしたと考えられる動物の描写が見受けられる。

まず、家畜類の描写を確認してみよう。先に確認したロバを擁護する一節の前には、馬の美徳を讃える詩句が置かれている。実は、『博物誌』においてもロバの解説は馬の解説の後に置かれているから、こうした配列上の特徴からもドリールがビュフォンを参照したのではないかという仮説を立てたくなる。そして、両者のテクストを突き合わせてみると、馬の特質を捉えようとする二人の作家の手つきが似通っていることに気づかされる。

見よ、この誇り高き軍馬を、その主人の気高き友を、

その戦場での伴侶を、野でのしもべを。
（中略）
彼は［主人の］拍車を見越し、制御に従う。
その衝撃で、青銅のよろいを砕く。
その能力と、殺戮と、栄光とに酔いしれつつ、
われわれと勝利の誇りを分かち合う[14]。

ドリールが馬の特質として強調しているのが、戦場においても、畑においても、人間のよき伴侶であり続けようとする忠実さである。そして忠誠をつくす馬の姿はビュフォンの『博物誌』でも浮き彫りにされている。

人間が今までに行った征服のうちで最も高貴なものは、戦いの疲れと功績を分かち合うこの誇り高く、血気盛んな動物の征服である。（中略）馬は勇気にあふれるとともに従順なので、興奮に突き動かされるがままになることは決してなく、その行動を抑えることをわきまえており、自分を御する者の手に従うだけでなく、（中略）その望むところをよく吟味しているようである[15]。

確かに、「馬は人間に忠実である」という主張自体はドリールやビュフォンにオリジナルのものとは言えないかもしれない。しかし、『自然の三つの領域』における「彼［＝馬］は［主人の］拍車を見越し、制御に従う。」という詩行と、『博物誌』の「（馬は）自分を御する者の手に従うだけでなく、その望むところをよく吟味しているようである」という一節には、着想面での共通点が見いだされる。博物学者に倣い、詩人もまた、しなやかな感性と知性で主人の心の動きを巧みに読み取る馬の姿を感嘆の念をもって眺めやるのである。

馬と並んで、人間に最も身近な動物である犬についての一節でも、ドリールはやはりこの動物の従順さを高らかに歌い上げる。

受けた恵みに対してのみ優しい感謝の念を抱き続け、
彼［＝犬］は罰を受けた後でも私の手をなめにくる。
たいていは私を眺めやり、優しさに潤み、
愛情に満ちた彼の目は愛撫を嘆願する[16]。

ひどい仕打ちを受けた後ですら、かわらず主人に優しい愛着の念を抱き続ける犬の健気さを歌ったこの詩行は、ビュフォンの次のような解説を踏まえたものであろう。

犬は侮辱を受けた記憶よりも、親切にされた記憶に敏感なので、ひどい仕打ちを受けても気分を害することはなく、そのような仕打ちを甘受し、忘れるか、覚えていていたとしてもなおいっそう［主人に］愛着の念を覚えるのである。いらだったり、逃げ出したりするどころか、自ら進んで新たな試練に身をさらし、自分を打擲したばかりの苦しみの道具である手をなめ、ただ不満の念を示すだけであるが、その不満さえも最後には忍耐強さと従順さで悲しみを抑えてしまうのである[17]。

実際、犬のタブローを締めくくる詩節では、この動物を作品の中で取り上げた大作家として、ホメロスとビュフォンの名が挙げられているから[18]、ドリールが『博物誌』に取材した可能性はきわめて高いと考えられる。

犬の従順さを歌に詠むにあたり、ドリールはまず、博物学者による解説をよりどころとする。しかし、上掲の詩行にもすでに「私」という人称代名詞が立ち現れていることからも予測されるとおり、科学的知識に基づいた動物の描写の中に、詩人はいつしか光を失った自己の心境をそっと忍び込ませるのである。

命令すると、私のもとにやって来る。威嚇すると、逃げてゆく。
私が呼ぶと、戻ってくる。合図をすると、ついて来る。

（中略）
農場では厳しく、都市では優しく、
彼［＝犬］は不幸な者の世話をし、盲人を導く。
そして不幸なエリコン山のベリサリウスたる私、
おそらく彼の目がいつしか不幸な私を導くことだろう[19]。

ドリールが盲人であるという事情から、本来人間と犬との間に存在する主と奴の関係が反転する可能性が示唆されている。しかしながら、「不幸な」という語がたたみかけるように現れるこの一節を、単なる盲者の嘆きの歌と結論づけるのは早急である。光を失った自分を、輝かしい軍功を立てながらも失明するという不運に見舞われたとされるビザンチン帝国の将軍ベリサリウス[20]になぞらえていることからも察せられるとおり、ドリールはここで受難する選ばれし者としての自己イメージをも提示しているのである。さらに、目の見えない詩人としての自己を強調することは、ドリールにとってきわめて大きな意味を持っていたと考えられる。というのも、詩人であり、かつ盲人であると言明することは、彼が敬愛するホメロスやミルトンと同じ境遇にあると主張することにほかならないからである。つまり、「犬に導かれる私」を描く詩行は、ドリールの悲しみと同時に、詩人としての矜持を伝えるものとみなしうるのである。こうしてドリールは、博物学者から材を取りながらも、個人的な体験をもとに独自の色調に染め上げて、自然の歌に織り込んでゆくのである。

III.　詩人による博物学的言説の変奏

家畜という卑近な生き物を、最も高貴な表現手段である韻文の主題として扱うことは許されるのか。この困難な問題を、ドリールは二つの手段をもって解決しようとしたと考えられる。まずは、博物学的知識をふまえた動物のタブローを描きつつ、これらのタブローが読者にとって事物の本質を捉えるのに有用であると示すことによって。そして第二に、人間との関わりからこれらの動物のパトスに注目しつつ、作品世界に叙情詩のような

雰囲気を醸し出すことによって。

それでは、異国の動物の描写についてはどうだろうか。まだ見ぬ世界の動物の生態を語るにあたっては、ビュフォンをはじめとする博物学者の言説に頼らざるを得なかったのは言うまでもない。そしてそのような博物学的言説に詩情を与えるためにドリールが浮き彫りにしようとするのが、異国の動物の驚くべき習性、能力なのである。詩人は、動物の卓越した技能を提示しながら、読者に大いなる驚きの感情を惹起し、かくして崇高の観念を抱かせようと試みた。恐ろしいライオンやワシの生態についてのタブローを描く時と同様、ドリールはここで、バークの崇高論をよりどころとしているのである。

人を驚かせる技能を有する動物として、ドリールが歌に詠んでいる動物の一つにビーバーが挙げられる。ドリールが何よりも称賛したのは、のこぎりのような前歯、平たい尾、機敏な指を駆使して見事なダムを作り上げる建築家としての才能である[21]。『自然の三つの領域』初版の注釈者は、ビーバーの本能を称賛する一節について、イギリスの探検家にして博物学者、サミュエル・ハーンによる記録を参照するよう指示している[22]。確かに、サミュエル・ハーンは1770年から71年にかけて、北カナダ地方を最初に探検したヨーロッパ人であるから、ビーバーの生態を自分の目で確かめた探検家の記述を引き合いにするのはある程度妥当な判断と言えるだろう。そして実際、ハーンはビーバーが「小屋」[23]を構築するプロセスや、その構造、季節ごとのビーバーの行動の変化について詳細な解説を展開している。ドリールも季節や場所にあわせて、ダムの作り方や維持法をかえるビーバーの細やかな配慮を歌っており、現実に即した動物の姿を描き出すべく、ハーンの記録を参照した可能性は高いと考えられる。しかし、ハーンの記述とドリールの詩句を比較した時、詩人によるビーバーの称賛に存在する重要な一要素が、ハーンのテクストには欠落していることが明らかになる。それは、人間とビーバーとの比較である。

異邦人はビーバーの中に人間を見いだし、

この動物をみて驚き、ふたたびじっくりと眺める[24]。

ビーバーが発揮する建築術がいかに並外れたものであるか伝えるため、ドリールはここでビーバーの技術を人間の能力になぞらえている。実は、ビーバーと未開人の技術との比較は、ビュフォンによるこの動物の解説において軸となっているものである。

> ビーバーの社会と未開人の社会が生み出す産物を検討してみよう。ビーバーの技術がどれほど発達しているか、未開人の技術がどれほど限られているか検討してみよう[25]。

ビュフォンによれば、ビーバーが見事なダムを作ることができるのは、ひとえにこの動物が仲間と共同作業を行えるからであり、その点においてビーバーの群れには、未開人の形成する社会と同程度の社会が認められるというのである[26]。

『自然の三つの領域』においてビュフォンの影響がよりいっそうはっきりと確認できるのは、ビーバーとならんで「世界の驚異」[27]と称されるゾウの描写においてである。詩人が「驚嘆すべき器官」[28]として詳述しているのがゾウの鼻である。

> それゆえ、全能の神により一つの器官に
> 三つの感覚を集められた生き物が存在する。
> この三つの感覚を備えたしなやかな手は
> 触覚により視覚の過ちを矯し、
> 物体の性質を確かめるのに長けていて、
> 同時に感じ取り、吸い込み、においを嗅ぐことができる[29]。

ドリールによれば、動物の本能は、諸感覚の間の捉える情報をもとに外界の事物についての判断を下すから、諸感覚間の相関関係が確実であればあ

るほど、本能は迷うことが少ないとされる[30]。ゾウの鼻が外界の事物を認識するのに優れた能力を発揮するのは、三つの感覚がこの一つの器官に集約されているために、これらの感覚の間により確かな関係性が築かれるからに他ならない。ゾウの鼻と感覚についてドリールがここで展開している議論は、明らかに『博物誌』のゾウに関する解説を下敷きにしたものであろう。

> ゾウの鼻の先端には、繊細な触覚、鋭い嗅覚、しなやかな動き、そして強い吸引力が備わっている。自然がその大切な被造物に鷹揚に与えたあらゆる道具のうち、ゾウの鼻は最も完成されていて、最も称賛に値するものだ。これは、単なる一器官であるだけでなく、三つの感覚を備えており、それらの働きが組み合わさると、ゾウを他の動物と分け隔て、それらの優位に立たせるあの判断力と能力の原因ともなり、また結果を生み出しもするのである。ゾウは他のいかなる動物と比べても、視覚の過ちに左右されることが少ない。なぜなら、視覚の過ちをすぐさま触覚によって矯し、遠くの事物に触れるために、あたかも長い手のように鼻を用いて、われわれと同じように正確な距離感をつかむのである[31]。

ゾウの鼻が三つの感覚を備えているという主張、視覚は過ちを犯すのに対して、触覚はその過ちを矯すという主張は、詩人と博物学者がそれぞれ独自に考えついたとみなすには、あまりにも酷似しすぎている。

それではなぜ、『博物誌』に描き出されるさまざまな動物界の「驚異」の中で、ゾウの鼻と感覚についての議論がドリールの目を惹いたのだろうか。実は、ドリールがその自然の歌において、触覚が視覚に勝るという議論を展開するのはこれが初めてではない。『自然の三つの領域』に先だって公刊した哲学詩『想像力』(1806)において、詩人はすでに、触覚をより正確な外界の認識を約束する感覚として礼賛しているのである。

目はより力強く、大地と空を捉える。
しかし、触覚が視覚に諭さぬ限り、
無知のまなざしは広大な空間のなかでさまよう。
距離、場所、形、大きさ、
視覚にとってすべては疑わしく、確かなのは色合いだけだ。
だが、ああ触覚、ああ偉大なる神よ！　ルクレティウスが証明するように、
触覚、すなわち五感の王者は、その豊かさにおいてすべての感覚に勝るのだ[32]。

触覚優位を声高に訴えるこの詩句には、18世紀のフランス思想界で多くの哲学者、作家たちの関心を集めたモリヌークス問題の影響が認められる。これは、ロックとその読者モリヌークスが触覚と視覚のいずれが優位に立つかという問題をめぐって展開した議論で、視覚を五感のうちで最も高貴な感覚とするプラトン以来の考え方に疑義を差し挟むものであった[33]。ドリールは豊かな読書経験をもとに、詩作を通して百科全書的知に到達することを目指した詩人である。したがって、『想像力』第二版の注釈者のように、上掲の詩句は、晩年詩人が失明したという純然たる個人的体験をもとに紡ぎだされたとするのは早計であろう[34]。触覚と視覚に関する議論は、ドリールの先達サン＝ランベールによって、すでにその自然の歌のなかで取り上げられた主題であった[35]。ドリールがその晩年の著作で繰り返し五感に関する議論を取り上げ、視覚に対する触覚の優位を強調するのは、盲人の詩人として使命感をもって、同時代の思想家、作家たちによって取りざたされた問題に、自分なりの回答を示そうとしたためだと考えられる。

***

『自然の三つの領域』序文の中で、ドリールは確かに、ビュフォンとの影響関係を否定していた。しかし、第七歌、第八歌に描き出されるさまざまな動物のタブローを詳細に検討してみると、それらが『博物誌』に展開さ

れる解説を参照しながら生み出されたものであることが分かる。また、多様な動物種についての各論に入るに先立ち、第六歌後半において、詩人は動物と植物の共通点、相違点について検討しているが、このような論理展開は、『博物誌』の『動物論』冒頭に展開される議論を想起させる[36]。さらに、第七歌冒頭では、博物学者としてのビュフォンの功績を讃える詩句が織り込まれているが、そこにはまた、彼と同じく自然の解釈者たろうとする自分が、いかにして独自の色彩を自然のタブローに与えるか模索する詩人の姿も透かし見える。

ビュフォンは、自然の雄弁な解釈者で
万物の歴史家であったが、私は万物の詩人となろう[37]。

「あらゆる博物学者の中で私が最も着想を借りることが少なかったのはビュフォン氏である」という序文での宣言に背いてまで、ドリールがビュフォンに依拠したのはなぜか。まず一つには、科学的根拠に基づいた自然のタブローを韻律に乗せて示し、危機に瀕していたフランス詩に新たな生命を与えようとしたためであろう。そして第二には、「描写する」という行為は単に作品世界を飾るためのものではなく、詩人が物の本性に迫るための手段となりうると示そうとしたためとも考えられる。

ドリール自身の危惧に反し、ビュフォンを参照したことは、必ずしも詩人の描き出すタブローの価値を落とすことにはならなかった。実際、本論で取り上げた数種の動物のタブローをはじめとして、ドリールの筆になる動物の描写の多くが19世紀に最も流布したノエルの教科書『フランス文学と道徳についての講義』に韻文における動物の「模範的描写」として引き合いにされている。しかも興味深いことに、ノエルは、散文における動物の描写の「模範」としては、ビュフォンを最も多く引用しているのである—しかもそうした引用の中には、同じ動物に関するものも含まれている[38]。ドリールは、動物のタブローを創出するにあたり、『博物誌』に主題を借りつつも、それを韻文家の手法を用いてうまく変奏してみようと試みた。ま

ずは個人の内面を織り交ぜ、叙情詩的な雰囲気を生み出すことによって。次に崇高の美学を実践に移すことによって。ノエルが二人の作家を等しく評価していることからは、同じ動物の生態についての解説が、別の文体の獲得を通して確かに新たな生命を得るとともに、新たな世界観を示し得ていることが明らかになるのである。

付記：本研究は、平成23年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究（B）（課題番号23720180）の助成を受けたものである。

註

1 Jacques Delille, *Trois Règnes de la nature*, avec des notes par M. Cuvier, de l'Institut, et autres savants, H. Nicolle, Giguet et Michaud, t. I, 1808, « Discours préliminaire », pp. 11-21. この点については、以下の拙論で触れている。「ジャック・ドリール『自然の三つの領域』（1808）に見られる動物の描写と博物学 (1) 」、『藝文研究』、第100号、2011年、pp. 193-206 (177)-(190)。

2 *Ibid.*, p. 30.

3 *Ibid.*, p. 34.

4 *Ibid.*, Chant VIII, pp. 245-246.

5 Buffon, *Histoire naturelle des Oiseaux*, Paris, de l'Imprimerie Royale, t. I, 1770, « Le Grand Aigle », pp. 79-80.

6 Delille, *Trois Règne de la nature*, « Notes du Chant VIII », pp. 274-276. 詳しくは、上掲の拙論 pp. 196-198, (185)-(187) を参照のこと。

7 *Ibid.*, Chant VIII, p. 243.

8 *Ibid.*, « Notes du Chant VIII », p. 274. Cf. Buffon, *Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi*, de l'Imprimerie Royale, t. IV, 1753, « L'Âne », p. 391.

9 Delille, *Trois Règne de la nature*, Chant VIII, pp. 243-244.

10 *Ibid.*, p. 245.

11 *Ibid.*, p. 244.

12 *Ibid.*, p. 245.

13 *Leçons françaises de littérature et de morale, ou Recueil, en prose et en vers, des plus beaux Morceaux de notre Langue dans la Littérature de deux siècles,*

avec des Préceptes de genre, *et des* Modèles d'exercices *par La Harpe, Marmontel, Maury, Le Batteux, etc. Ouvrage classique, adopté par l'Université royale de France, à l'usages des Collèges et Institutions*, par M. Noël et de la Place, Le Normant Libraire, 22 éd., 1836, t. II, pp. 233-235.

14 Delille, *Trois Règne de la nature*, Chant VIII, pp. 242-243.

15 Buffon, *Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi*, t. IV, 1753, « Le Cheval », p. 174.

16 Delille, *Trois Règne de la nature*, Chant VIII, p. 239.

17 Buffon, *Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi*, t. V, 1755, « Le Chien », p. 186. 強調は引用者。

18 Delille, *Trois Règne de la nature*, Chant VIII, p. 240.

19 *Ibid.*, p. 239.

20 ベリサリウスが失明したとする逸話は、マルモンテルの小説『ベルサリウス *Bélisaire*』（1767）によって18世紀後半の読者に広く知られ、頻繁に演劇や絵画の題材として取り上げられた。

21 Delille, *Trois Règne de la nature*, Chant VII, pp. 161-162.

22 *Ibid.*, « Notes du Chant VII », pp. 213-215.

23 *Ibid.*, p. 214.

24 *Ibid.*, Chant VII, p. 162.

25 Buffon, *Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi*, t. VIII, 1760, p. 285.

26 *Ibid.*, pp. 285-287.

27 Delille, *Trois Règne de la nature*, Chant VII, p. 161.

28 *Ibid.*

29 *Ibid.*, p. 159.

30 *Ibid.*

31 Buffon, *Histoire naturelle générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi*, t. XI, 1754, pp. 53-54.

32 Delille, *L'Imagination*, deuxième édition, M. G. Michaud, t. I, 1825, Chant I, p. 46.

33 詳しくは以下の拙論で展開している。「啓蒙期の感受性論からロマン主義の叙情詩へ――ジャック・ドリールの『想像力』（1806）を中心に――」『慶應義塾大学日吉紀要　フランス語フランス文学』、第49、50号、2009年、pp. 9-28（特に pp. 22-25を参照のこと）。

34 Delille, *L'Imagination*, pp. 79-80.

35 Saint-Lambert, *Les Saisons*, Clérmont, Pierre Landriot, 1814, « Notes sur le Printemps », p. 58.

36 Delille, *Trois Règnes de la nature*, Chant VI, pp. 74-77. 同様の議論には第七歌にも見受けられる。*Ibid.*, Chant VII, pp. 133-135. Buffon, *Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi*, t. IV, 1753, « Discours sur la nature des Animaux », p. 3 et seq.

37 Delille, *Trois Règnes de la nature*, Chant VII, p. 132.

38 Noël et de la Place, *op. cit*, t. I, pp. 181-209.